2006年早稲田大学法学部水島ゼミ平和班主催討論会

ハイサイ平和

～真の継承とは何か～

2006年8月30日　@平和祈念資料館会議室

～ご協力　謝花直美氏　沖縄タイムス社～

目次

ご挨拶　　早稲田大学法学部教授･法学博士　水島朝穂 ･･･････････････････････2

ご挨拶　　水島ゼミ平和班　代表 廣瀬由衣 ･･･････････････････････････････3

水島ゼミ紹介 ･･･3

水島ゼミ教授紹介 ･･･4

平和班紹介 ･･･4

平和班合宿日程 ･･･5

ハイサイ平和 ･･･6

　　討論会の目的 ･･･6

　　プログラム ･･･7

～　別紙　～

- 参加者紹介
- 青山学院大学入試問題について
- 討論会についてのアンケート

ご挨拶

本企画は、早稲田大学法学部水島ゼミ沖縄合宿「平和班」主催によるものです。 私のゼミは1998 年以来、2年に一度この時期に沖縄で合宿をしています。合宿といっても、このゼミでは、学生たちが4ないし5つの班に分かれて、各地の問題の「現場」を直接訪れ、さまざまな人びとと出会い、話を聞くという形をとります。過去4回の沖縄合宿（98 年、00 年、02 年、04 年）でも、平和班、基地班、地方自治、地域産業、ユタと宗教問題、教育など、さまざまなテーマを扱ってきました。テーマの選択、取材対象を含めて、すべて学生たちで相談して決めます。私は対象者の紹介など、技術的な点だけ協力します。今回の企画も、すべて学生たちで考え、立案・準備してきました。ただ、このテーマには前史があります。

水島ゼミでは広島合宿や長崎合宿（2回）を経て、過去何度も、戦争体験や被爆体験の「継承」の問題を議論してきました。戦後61年の沖縄において、今回の「平和班」がそれを正面から取り上げようとしたことは、過去のゼミ合宿の伝統と蓄積の上に立ったものであり、その意味では、ゼミ指導教員として学生たちのなかに流れる「問題意識の連鎖」を感じます。

戦後の還暦が過ぎ、いま、戦争体験の継承の問題はどこでも重要で、また困難な課題です。ある高校が「語り部の話は退屈だった」という英文の入試問題を出題したことは、大きな反響をよびました。沖縄の怒りは十分理解できます。しかし、あの出題をした教師の問題意識はまったく間違っていたのでしょうか。メディアの報道の仕方にも問題があり、非常に不幸な形で沖縄に伝わり、あのような議論になった可能性があります。どうやったら戦争体験が継承できるか、という点での問題意識は、あの出題をした教師も持っていたようです。ただ、それを入試問題という形で出したこと、解釈の余地があり、微妙なニュアンスが伝わりにくい英文だったこと、解答の選択肢に考慮が足りなかったことなど、不適切な面は否定できず、批判されてもやむをえない面があったと思います。「語り部の話は退屈だった」という反応がなぜ出てくるのか。この事件からも明らかなように、戦争体験をどう継承するかは、61年も経過すると一筋縄ではいかないことは明らかだと思います。私としては、戦争体験の継承は、内容的な整理から表現方法の練磨にいたるまで、本格的な検討が必要と考えています。これはヒロシマ、ナガサキ、オキナワ、そして東京空襲をはじめとする空襲体験、さらにアジア諸国との関係での「加害体験」の継承の問題にも共通する問題です。

この企画を考えた「平和班」も、おそらく私と同じように、この問題を正面から扱い、沖縄の「現場」であえて議論したいということだと思います。この問題意識を是非お汲み取りいただき、今日の企画にご協力いただければ幸いに存じます。ただ、なにぶん学生のことですので、アポイントから企画全般に至るまで、配慮の足らない面が多々あると思います。そこは「学ぶに生きる」という真昼前を歩む若者たちのチャレンジ精神と知的好奇心に免じてお許しください。

今日は、学生企画にご協力いただき、まことにありがとうございました。指導教員として、一言ご挨拶申し上げました。

2006 年 8 月　　早稲田大学法学部教授・法学博士　水島朝穂

ご挨拶

本日は、お忙しい中、水島ゼミ平和班の企画討論会「ハイサイ平和～真の継承とは何か～」にご参加いただき、誠にありがとうございます。

水島ゼミは、毎年班に分かれて取材合宿を行っておりますが、今回、平和班が討論会という場を設けさせていただいた理由は、沖縄の皆様の、多様な声を受け止め、「平和」「真の継承」について勉強させていただくことができるのではないかと考えたからです。

学生主催の企画ですので、行き届かない点も多々あるとは思いますが、討論会に出席してくださいました皆様と、私たち班員の全員が、「平和」について再考するきっかけになればこれほど嬉しいことはございません。

最後に、ご出席いただいた皆様に改めて感謝の意を表しまして、ご挨拶に代えさせていただきます。

平和班代表　廣瀬由衣

水島ゼミ紹介

早稲田大学法学部水島ゼミでは、約40名の学生が日夜活発な活動を行い、伝統と斬新の中に成長を続けています。ゼミは「憲法ゼミ」ではありますが、その活動は憲法判例の分析に留まりません。〝**憲法の動態的研究**〟即ち社会問題を憲法的観点から掘り下げるという理念の下に、調査/討論をしています。

事件の判例を調べて、簡単なコメントをつけて終わりにするのではなく、事件の時代背景や社会的背景、訴訟過程などにも分け入り、言わば、憲法の法社会学的側面の検討を重視します。

水島ゼミの特色は〝**個性尊重**〟〝**好奇心旺盛**〟〝**現場主義**〟です。

学生は様々な地方から集い、そして、多彩な趣味と専門/得意分野を持っています。1つのテーマを扱っても様々な視点からの発言が溢れ、討論は毎回大変な活況を呈します。高い問題意識を持った好奇心の強い学生が集まるので、ゼミ後のアフターでの議論奮闘もしばしばです。

机上の空論とはならないよう、各自の自発的且つ頻繁なフィールドワーク、取材そして合宿を行い、実際の現場を忘れません。公式な形でのものから、ゼミ生発案による任意参加の勉強会やフィールドワークまで、活発に行っております。http://mizushima-s.pos.to/ （水島ゼミホームページ）

水島ゼミ教授紹介

水島　朝穂　（　みずしま　・　あさほ　）

■担当科目

憲法、法政策論

■著書

『憲法「私」論――みんなで考える前にひとりひとりが考えよう』（単著）小学館／『戦争とたたかう――一憲法学者のルソン島戦場体験』日本評論社／『武力なき平和――日本国憲法の構想力』（単著）岩波書店『世界の「有事法制」を診る』（単編著）法律文化社／『改憲は必要か』（共編著）岩波新書　ほか多数

■その他

TV、新聞など出演多数。NHK ラジオ「新聞を読んで」レギュラー

http://www.asaho.com/（ホームページ「平和憲法のメッセージ」）

平和班紹介

水島ゼミの合宿の特徴は、ゼミ生全員が共に行動するのではなく、ゼミ生各自の問題意識に合わせて班を構成し、それぞれの班で日程を組んで取材活動や見学、調査を行うところにあります。わたしたち平和班は、その名前の通り「平和」に興味があるゼミ生がその構成員となっています。「平和」というのはとても広い概念なのですが、班の柱としての問題意識は**真の継承とは何か**です。

平和とは何か・何を目的として・どんなことをどのように伝えるべきか・またそれは本当に伝える必要性があるのか。必要があるならどのような手段が効果的か。三泊四日の合宿で様々な立場の方々を取材させて頂きながら、真の継承について考えます。

平和班メンバー紹介

廣瀬　由衣（ひろせ　ゆい）　9 期生	藤田　裕喜（ふじた　ひろき）　7 期生
石崎　冬貴（いしざき　ふゆき）9 期生	高柳　亜美（たかやなぎ　あみ）9 期生
田中　美千瑠（たなか　みちる）9 期生	福田　匡剛（ふくだ　まさたか）9 期生
赤嶺　貴子（あかみね　たかこ）10 期生	鶴見　譲（つるみ　じょう）　10 期生
箕輪　暁（みのわ　さとる）　10 期生	和田　俊樹（わだ　としき）　10 期生
照屋　朋子（てるや　ともこ）　合宿特別参加者	

平和班合宿日程

2006年8月28日～8月31日（三泊四日）

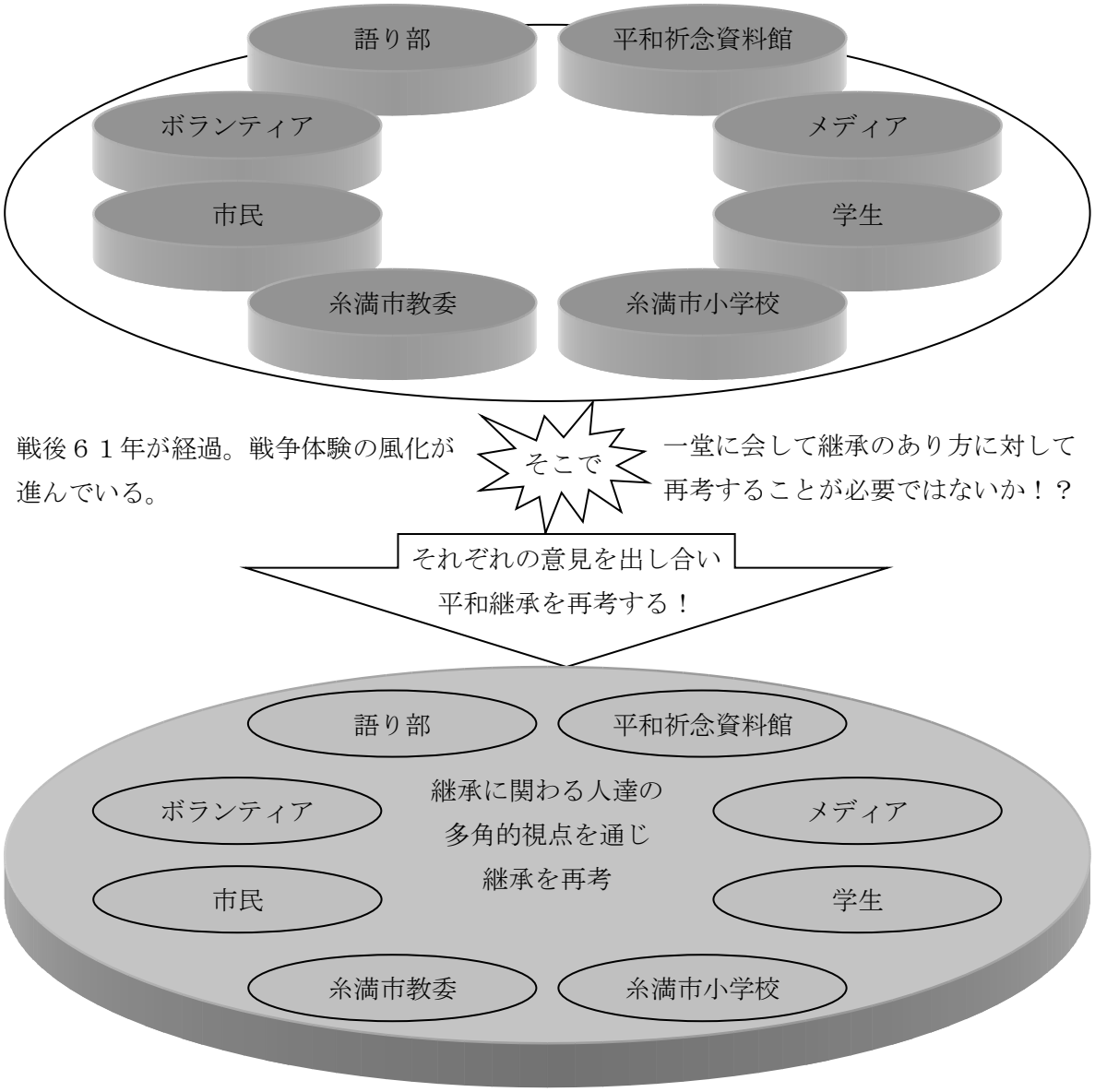
8月２８日	１４時～　南風原町文化センター　大城館長取材
	１４時～　糸満市教育委員会　金城善氏取材
	午後～　高校生路上調査（高校生に対する街頭アンケート）
8月２９日	９時３０分～　糸満市立潮平小学校　取材
	１０時～　古堅小学校　取材
	１４時～　沖縄国際大学社会文化学部教授　石原昌家氏取材
	１５時～　読谷村役場　小橋川清弘氏　取材
	１５時～　ひめゆりの塔
	２０時～　元ひめゆり学徒隊　宮良ルリ氏取材
8月３０日	１０時～　みなみの里　取材
	１３時～１６時　討論会「ハイサイ平和」
	２０時～　コンパ
8月３１日	１０時３０分～　沖縄県平和祈念資料館

☆Memo☆

ハイサイ平和

今討論会の「ハイサイ平和」は、平和班でネーミングしました。今、改めて平和と向き合ってみようという姿勢を表現したものです。

■　討論会の目的　■



現状　**『継承』は学校・資料館・史跡・語り部・家庭**などでなされてきたが、**それぞれ問題を抱える。**

学校はその構造から、**一方通行的・押付け的**になり易い。地域や先生により差も生じる。
資料館・戦跡は、**受身**になり易い。即ち、問題意識希薄な人の『開拓』は望み難い。
戦争体験のある語り部は存続に限界がある。戦争体験世代でないと語り部として受容されにくい難しさもある。
家庭でも、戦争体験者の減少のなかで次世代への継承に限界がある。

こうした現状があるにも拘らず、主体間で**相互に議論**する機会があまりなかったのでは。

目的　さまざまな立場の「担い手」たちが一堂に会して議論をする事で、
ひとりひとりが継承に対する考え方を再考し、新たな継承のあり方を考える（例えば継承主体同士での協力関係ができる、など）。

■　プログラム　■

【１部】（抽象論編）
＜導入＞問題となった青山学院高等部英語の入試問題について
どう思うか？
↓
＜論点＞・平和について学ぶことは退屈であると考えるか
・平和を絶対的に押し付けることが真の継承であるか　etc.

【２部】（実践論編）
①各参加者の取り組みの問題点
→1 部で問い直した各自の継承の目的を踏まえた上で、各自の取り組みの（成功している点と、）問題点について
②問題点に対する解決策
→①の問題点に対する解決策について

☆Memo☆